

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 1日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21530947

研究課題名（和文） ヨハネス・イッテンの芸術教育における理論的基盤と教育実践との連関

研究課題名（英文） A Study on the relation between theoretical research and practice in the art education of Johannes Itten

研究代表者 金子 宜正（KANEKO YOSHIMASA）

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：20263965

研究成果の概要（和文）：ヨハネス・イッテンが老子の道德経や禅仏教、陰陽の法則や易の思想に関心を持ち、イッテン・シュレーの教育に日本の墨絵が取り入れられていたことはすでに論じた。本研究では、イッテンがハンス・カイザーを介して易の思想についての探究を深めていたことを明らかにし、古代エジプトのヒエログリフ、パーリ語、森羅万象・自然・芸術の中にみられる調和などへの関心及びイッテンの理論的探究と教育実践との繋がりについて研究した。

研究成果の概要（英文）： I already considered that Johannes Itten was very interested in the philosophy of Lao-tse's Tao Te Ching, Zen-Buddhism, the concept of Yin-Yang and the divination lore. And I treated the Japanese Sumi-ink drawing's lectures was added at the Itten-Schule's curriculum. In this research, I clarified that Itten searched deeply for divination lore Yi-Jing through Hans Kayser. Itten was also interested in the ancient Egypt's hieroglyph, Pali, and the harmony in the universe, in the nature and the art. I treated the relation between Itten's theoretical research and his practical art education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：ヨハネス・イッテン、バウハウス、イッテン・シュレー、イッテン日記、エヴァ・プラウト、美術教育

1. 研究開始当初の背景

2002-2003年のドイツ・スイス及び2003-2004年の日本において、ヨハネス・イッテンの芸術と教育活動にかかわる大規模な展覧会が開催され、それまで研究代表者が明らかにしてきたイッテンの芸術教育と日本との関わりについても大きくとりあげられた。次いで2005-2006年のドイツでは、ヨハネ

ス・イッテン、パウル・クレー、ヴァシリー・カンディンスキーの思想的な背景に迫るバウハウス関連の展覧会が開催された。これらの展覧会を契機として、欧州を中心に、日本においても、展覧会関連の学術的な企画として国際シンポジウムや研究会が開催され、展覧会図録や関連研究書籍の出版が続くなど、イッテンに関する研究も多方面から進めら

れてきた。

研究代表者は日本で開催された『ヨハネス・イッテン 造形芸術への道』展覧会の関連企画・美術科教育学会<東地区>公開研究会に招かれ、「イッテン・シューレに学んだ自由学園からの留学生」と題して宇都宮美術館（2003年）で発表した。さらに、ドイツのハム市のGustav-Luebecke-Museumで開催された“Johannes Itten - Wassily Kandinsky - Paul Klee. Das Bauhaus und die Esoterik”展覧会の学術関連企画・国際シンポジウム“Esoterik am Bauhaus. Eine Revision der Moderne?”に主催者側から招聘され、研究代表者は“Johannes Itten and Zen(ヨハネス・イッテンと禅)”と題して英語による研究発表（2005年）を行なった。

また、これまでに研究代表者が纏めた研究論文数編(英訳したものを含む)は、ドイツ及び日本で出版された以下の文献の参考文献一覧や論文の註で紹介されてきた。

・『日本の前衛 Art into Life 1900-1940』展覧会図録、京都国立近代美術館、水戸芸術館現代美術センター、1999.

・『ヨハネス・イッテン 造形芸術への道』展覧会図録、宇都宮美術館、京都国立近代美術館、東京国立近代美術館、2003.

・『水越松南』展覧会図録、姫路市立美術館、2005.

・Avantgarde im Dialog. Bauhaus Dada und Expressionismus in Japan, Bauhaus-Archiv Berlin Museum fuer Gestaltung, 2000.

・Johannes Itten. Wege zur Kunst, Johannes-Itten-Stiftung, Hatje Cantz Verlag, 2002.

・Johannes Itten und die Moderne, Hatje Cantz Verlag, 2003.

・Johannes Itten. Alles in Einem- Alles im Sein, Hatje Cantz Verlag, 2003.

・Johannes Itten - Wassily Kandinsky - Paul Klee. Das Bauhaus und die Esoterik, Kerber Verlag, 2005.

さらに、先に述べた展覧会関連企画のシンポジウム等に伴って編纂された次の二つの研究書籍（日本及びドイツ）には、編者からの依頼を受け、研究代表者が執筆した論文が掲載された。

・金子宜正「イッテン・シューレに学んだ自由学園からの留学生」岡本康明編集『ヨハネス・イッテン 造形芸術への道 JOHANNES ITTEN WEGE ZUR KUNST 論文集』宇都宮美術館 2005年 53-80 頁所収

・Yoshimasa Kaneko, Johannes Itten and Zen, in: Hrsg. von Christoph Wagner, Esoterik am Bauhaus. Eine Revision der Moderne?, Verlag Schnell&Steiner GmbH Regensburg (ドイツ), 2009, pp. 150-172.

また、イッテンの教え子、ボリス・クライントについて、ドイツの研究機関からの依頼を受けて研究代表者が執筆した論稿が次の研究書籍（ドイツ）に掲載された。

・Yoshimasa Kaneko, Anmerkungen zur japanischen Ausgabe der “Bildlehre” von Boris Kleint, in: Hrsg. von Jo Enzweiler, Boris Kleint. Malerei Glasbilder Plastische Bilder Stelen Kunst im oeffentlichen Raum 1933-1992, Krueger Druck + Verlag GmbH Dillingen, Verlag St. Johann, Saarbruecken 2009, pp. 202-203.

これまでの研究の中で、研究代表者は、2004年に日本デザイン学会より、「平成16年度日本デザイン学会年間論文賞」を受賞した[受賞研究論文：「ベルリンにおけるヨハネス・イッテンと日本人との交流」『デザイン学研究』BULLETIN OF JSSD Vol. 50, No. 6, 2004年 1-10 頁]。

そして、2008年には、研究代表者は美術科教育学会より、「2007(平成19)年度『美術教育学』賞」を受賞した[受賞研究論文：「ヨハネス・イッテンの芸術教育における人間を中心とする考え方について—『イッテン日記』の内容分析とエヴァ・プラウトとの談話をふまえて」美術科教育学会誌『美術教育学』第28号 2007年 143-155 頁]。

本研究の開始年度 2009 年はイッテンが教鞭を執ったバウハウスの創立 90 周年の記念すべき年にあたり、ヴァイマル・デッサウ・ベルリンの研究機関が協力して大規模な展覧会が開催されるなど、バウハウス及びバウハウスに関わりのある研究が、これまでにない規模で広がってきた。

このような時期にあたり、研究代表者のこれまでの研究をふまえ、東西双方の視点から、イッテンの芸術教育についての理論的基盤と教育実践とのつながりについて研究を進めることとした。

2. 研究の目的

これまでの研究を通して、私はイッテンの東洋思想、老子や禅仏教、陰陽の法則や易の思想への関心をふまえ、イッテンと日本人画家(竹久夢二、水越松南)との交流の詳細を明らかにするとともに、イッテンの教え子であった山室光子、笹川(今井)和子、エヴァ・プラウトに聞き取り調査を行ない、イッテン・シューレの教育内容、イッテンの教育にみられる人間を中心とする考え方や授業課題の連関について論じてきた。これらの研究をふまえ、イッテンの芸術教育にみられる領域を超えた思考や調和のとれた人間形成に関わる考え方について解き明かすことが重要と考えた。イッテンは教員養成課程で学んでか

ら芸術家を志しており、教育学、芸術学、哲学、天文学、音楽、文学や、身体性、精神性など多様な要素が彼の芸術教育には融合している。さらに、イッテンはゲーテや老子をはじめ、西洋と東洋双方の思想に関心を抱き、理論的実践的な研究を通して東西への探究を深めていた。イッテンの思想探究が彼の教育実践にどのように融合していたかを明らかにすることは、イッテンの芸術教育の本質を捉える上で重要である。

本研究では、新資料の調査及びイッテンの手書きの「日記帳」や「書簡」等にみられる東西の思想探究に関わる記述について詳しく調査研究を進めるとともに、関係者への聞き取り調査を行ない、イッテンの思索や探究と彼の芸術教育実践とのつながりを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

イッテンの芸術教育観を支える思想や考え方、そしてイッテンの教育方法の実際を把握していくためには、彼が最も活発な教育活動を展開していた時期の手書きの「日記帳」や「書簡」等の未公開資料を紐解くことが重要と考えた。イッテンの教育活動は、ウィーン、ヴァイマル、ベルリン、クレーフェルト、チューリッヒと大別されるが、イッテンに関連する資料はそのほとんどが欧州に保管されており、財団、美術館、資料館所蔵の資料や大学等の研究機関及び個人所蔵の資料が欧州各地に点在している。関連資料は、教育活動が行なわれた地域だけでなく、イッテンや関係者の移動に伴い、欧州各地に分散して保管されたためである。日本にも教え子や関係者がいたことから、必要に応じて国内における関係資料の調査を進めることとした。それぞれの資料の所蔵者に許諾を受けて調査研究を進め、手書きの資料など、解読に時間のかかるものは、許可を得て写真撮影もしくは複写依頼等を行ない、内容を解読していくこととした。

これらは、活字化されていない資料がほとんどであることから、イッテンの東西思想にかかわる記述や教育内容にかかわるものを選定して解読し、記述内容についての分析を進めることにした。

また、イッテンの教え子たちの授業作品や著述、イッテン・シューレ関係者が所蔵している新資料の発掘調査や、関係者への聞き取り調査を進めることとした。これらの調査研究と併せて、イッテンが活躍した時代の新聞や雑誌、イッテンの思想探究等に関わる書籍等の複写を行なうことにした。近年、当時出版されていた書籍のリプリント版が再版されるものがあることから、必要な関連資料はリプリント版を含めて収集するようにした。

さらに、最新の関連研究書籍を入手すると

ともに、これまでの研究上の交流をふまえ、ベルリンのバウハウス資料館をはじめとする現地の研究機関や大学の研究者等と最新の研究動向についての意見交換を継続的に進めるようにした。

4. 研究成果

2009年には、イッテンがかつて活躍したバウハウスが創立90周年を迎え、ヴァイマル・デッサウ・ベルリンの研究機関の作品や資料が展示される大規模な展覧会がベルリンで開催された。研究代表者はこの展覧会のオープニング式典に出席し、現地の研究者たちと活発な展開をみせる最新の研究動向について意見を交わすことができた。研究代表者が執筆した論稿が掲載された研究書籍が2009年にドイツで相次いで出版（《Esoterik am Bauhaus》 Schnell&Steiner 出版社、《Boris Kleint》 Krueger 及び St. Johann 出版社）されたことから、これらの内容も含め、有意義な意見交換を行なうことができた（前者は英文、後者は独文掲載）。

2010年2月には、「平成21年度 高知大学研究功績者賞」を受賞した。これは、「平成16年度日本デザイン学会年間論文賞」（2004年）及び「2007（平成19）年度『美術教育学』賞」（2008年）を受賞したことを評価されたものである。この高知大学研究功績者賞の受賞に伴い、2010年7月の第21回アカデミアセミナーにおいて「ヨハネス・イッテンの芸術教育における人間を中心とする考え方について」と題した発表を行なった。

また、2012-2013年にスイスのベルン美術館で開催された「Itten-Klee. Kosmos Farbe（イッテン-クレー 色彩宇宙）」展覧会の関連行事として開催された学術シンポジウム Die Entdeckung der Farbe（色彩の発見）[主催：Kunstmuseum Bern, Zentrum Paul Klee Bern（ベルン美術館及びパウル・クレー・センター）]（2012年11月）に出席し、ドイツ及びスイスの研究者たちと研究上の意見交換をした。展覧会に際して出版された図録 Hrsg. von Christoph Wagner, Monika Schaefer u. a., Itten-Klee. Kosmos Farbe, Verlag Schnell & Steiner, 2012. の文献一覧に研究代表者の論文が紹介された。

本研究では、欧州を中心に、新たに所在が判明した新資料についての調査研究を進めるとともに、イッテンの東西思想探究に関わる手書き資料などの解読を進めた。さらに、イッテンが活躍した時代の新聞・雑誌等の記事やイッテンの探究につながるのある書籍や関連資料の複写等を行なった。バウハウスの創立90周年を中心に、バウハウスの教師陣及びバウハウスの学生やバウハウス第二世代に関わる研究書籍、世界各地に広まったバウハウスの影響に関わる研究書籍等が出

版され、これら最新のバウハウス研究関連書籍及び関連資料を現地で入手した。現地での資料収集で得られた知見をふまえ、関連する国内資料についての調査を行なった。欧州の研究機関における調査の過程で、研究代表者によるイッテン研究に関心をもったという欧州の研究者を紹介され、研究上の交流を継続している。

イッテンが老子の道徳経を重視していたことはよく知られている。研究代表者はすでに、イッテンが老子だけではなく、禅の思想や陰陽の法則、易の思想などに関心を持ち、イッテン・シュレーの芸術教育の中に日本の墨絵を取り入れていたことについて論じてきた。プラウトをはじめとして、竹久夢二がイッテン・シュレーで教えた学生たちの墨絵作品等についても扱ってきた。また、これまでに研究代表者は、イッテンとハンス・カイザーとのかかわりについて論文等で触れてきたが、近年クリストフ・ヴァグナーの論稿にも両者について言及したものがみられる。

本研究において、研究代表者はイッテンの手書きの日記帳への記述内容についての解説をもとに、イッテンがハンス・カイザーを介して易の思想についての探究を深めていたことを明らかにすることができた。対極的な陰陽の組み合わせにより、宇宙の万有、森羅万象があらわされるという易の考え方は、イッテンがコントラスト（対比）や対極的な考え方を自らの芸術教育の基礎として重視していたことと呼応するものがあつたと考えられる。また、エレン・シュヴィンツァーも論じているように、イッテンは古代エジプトのヒエログリフにも関心を抱いていた。他にも、仏教の聖典に使われるパーリ語にかかわる記述や、森羅万象・自然・芸術の中にみられる調和などへの関心が窺えた。古代エジプトのヒエログリフについては、イッテン・シュレーにおける講義でも扱われており、森羅万象・自然・芸術の中にみられる調和にかかわるイッテンの探究もまた、イッテン・シュレーにおける教育に活かされていた。このように、イッテンの探究と彼の教育実践には密接なつながりがみられたのである。

先にも述べたように、イッテンは、芸術教育においてコントラスト（対比）や対極的な考え方を重要と考えていた。これに関連して、研究代表者がかつて実践した教育研究の成果から、教育プロセスに対比的な考え方や対極的な概念を活かすことは、創作や表現の手がかりを与え、教育上の効果が認められることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①金子宜正、「ヨハネス・イッテンの芸術教育における人間を中心とする考え方について—『イッテン日記』の内容分析とエヴァ・プラウトとの談話をふまえて—」(「平成21年度高知大学研究功績者賞」受賞に伴う研究紹介)高知大学リサーチマガジン、査読無、5、2010年、p.2

〔学会発表〕(計1件)

①金子宜正、「ヨハネス・イッテンの芸術教育における人間を中心とする考え方について」、第21回アカデミアセミナー、(平成21年度高知大学研究功績者賞受賞者研究発表)、2010年7月29日、高知大学

〔図書〕(計1件)

①(編著鈴木幹雄・長谷川哲哉)金子宜正[分担執筆]、あいり出版、『子どもの心に語りかける表現教育』執筆箇所題目:「図画工作・美術の教育プロセスに対比や対極的な思考を活用することについて」(3部10章)口絵10頁、本文126-136頁、「発想やアイデアを引き出し自己表現力を高める教育プロセスについて」(4部13章)口絵15頁、本文162-172頁、2012年、全214頁中126-136頁、162-172頁及び口絵10頁、15頁

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

金子宜正

「平成21年度高知大学研究功績者賞」受賞
受賞年月:2010年2月
受賞研究論文「ヨハネス・イッテンの芸術教育における人間を中心とする考え方について—『イッテン日記』の内容分析とエヴァ・プラウトとの談話をふまえて」美術科教育学会誌『美術教育学』第28号143-155頁2007年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金子 宜正 (KANEKO YOSHIMASA)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号:20263965

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し